政権 強硬姿勢貫く

9/17 福井

安保攻防ピーク

「違憲」はねつけ

採決めぐりピケ、怒号

表層 深層

安全保障関連法案の参院特別委員会の採決をにらんだ与野党の攻防は16日夜、最終局面に突入した。午後の地方公聴会終了後の異例の時間にセットされた特別委の締めくくり質疑。その先にある採決の阻止を狙う民主党などは、ピケ戦術など物理的な抵抗も排除せずに抗戦を続けた。違憲との異論をはねつけようとする政権は動じない。日付をまたいでも審議ができる手続きを取り、強硬姿勢を堅持。国会内には怒号が飛び交い、双方のせめぎ合いはピークに達しつつある。

何度も休憩を挟みながら続く、参院平和安全法制特別委理事会で、民主党の福山哲郎氏(中央)を鋭い視線で見詰める鴻池委員長(左から2人目)ら＝16日午後10時18分

▽封じ込め

「このまま採決はあり得ない。徹底審議を」。16日夕、参院特別委の理事会室前。数十人の野党議員は、与党理事らに激しく詰め寄った。

この日の特別委は安倍晋三首相も出席の採決を前提とした最終の質疑。深夜になっても始まらず、与野党による理事会が断続的に続いた。野党の女性議員らが、鴻池祥肇委員長（自民党）のいる理事会室前に陣取り鴻池氏の自由な動きを事実上、封じ込めた。山崎正昭参院議長が衛視に排除の命令を出す事態に発展。民主党幹部は「暴力はいけないが、体を張る」と戦術の一端を語った。

これに先立つ民主党の緊急集会。岡田克也代表は「いよいよ正念場だ。私たちの後ろには国民がいる」と力を込めた。16日からは党所属の衆参両院議員に国会周辺から離れることを禁じる「禁足」を命じた。民主を含む5党は党首会談などを開き、結束を強めた。

これに対し与党は臨戦態勢の構築を急いだ。自民党の佐藤勉国対委員長は国会内に急きょ若手議員約100人を集め「今国会もフィナーレだ。何があっても対応できる態勢をとってほしい」と強調。内閣不信任決議案などが提出された場合に備えるよう指示した。

▽見切り発車

収まらない野党側の反発には、報道機関の世論調査で違憲との回答が「過半数」となるなど多くの国民が法案は違憲で、法的安定性が崩れると懸念していることが背景にある。衆院側で審議中から憲法学者や内閣法制局経験者から次々と疑問の声が上がった。

15日の中央公聴会に続き、横浜市で開かれた16日の地方公聴会でも、公述人から「廃案にすべきだ」「法的安定性が保たれているとする説明は国民を欺くものだ」との意見が続出。法案への疑念が最終盤でも拭えていないことが浮き彫りに。

与党側は世論の声に背を向けて突き進む。自民党の二階俊博総務会長は16日、衆参両院で審議時間が200時間を超えたことを踏まえ「議論は出尽くした」と言い切った。公明党の西田実仁参院幹事長は記者会見で「どの法案についても100パーセント賛成はない」と見切り発車の採決を断言した。与党側は16日夜に法案成立に向け、17日の本会議開催を野党の反対を押し切って決めた。

▽代償

会期末が27日に迫る中で採決環境を整えようと動いてきた政権。首相は16日朝、次世代の党、日本を元気にする会、新党改革という三つの少数政党の党首と会談し、国会関与の強化を閣議決定で担保するとの内容の合意書に署名。3党の法案への賛成を取り付けた。

首相は「自公を合わせた5党で合意できたことは本当に良かった」と安堵の表情を浮かべる。政権幹部は「計5党も賛成するのだから、もう採決強行とは言わせない」と首相の胸中を解説した。

首相にとって、2006年発足の第1次政権時代からの宿題である安保法案。「採決を仮に来週まで遅らせても賛成者が増えるわけではない。ただ無理をする以上、今後の政権運営で何らかの代償を払わないといけないという覚悟は必要だろう」。自民党ベテラン議員はこう予言した。

安保法案採決をめぐる攻防

（似顔　本間康司）